

子」とは、人が番をして狭い口をふさぐという意味だ
そうだと。いっさい食糧を与えられず、長春市にも戻れ
なくなった人々は、飢えて死体を食べた。死体の上に
死体が重なり、何も知らずにそこに入ってきた人が、
その死体の上で寝たということである。広野に山が見
えると、その著者が書いていたので、「山なんかいい
わ！」と、叫ぼうとしたら、それは巨大な屍しかばねの山だっ
た。私たちの住んでいた家は廃きよとなって、そこ
も屍の山ができていた。白い墓標の数の何倍か分
かぬ人々が、中間地帯に命を落としている。今は、一
面に木が植えられて広大な林になっているとのことだ
た。

共産党軍のあの優しそうだった隊長を思うと、一
人、一人は皆善人なのだが、それが集団となり組織化
されると一変して、恐い集団となる。そして恐ろしい
戦争をひき起こし、残虐な行動をするのだ。

二十一世紀は、戦争のむなしさを知った庶民が、立
ち上がって手をつなぎ、戦争を回避することの努力を
せねばならないと思う。私は、被爆国を作らぬよう、

そして「卡子」を作らぬように心から祈るものであ
る。

ああ！ 母は北満の土となる

愛媛県 黒川 壽子

一 大陸への雄飛

昭和九（一九三四）年四月、私は父、越智丑太郎と
母、ユキエの長女として愛媛県松山市で生まれた。父
は愛媛県周桑郡丹原の農家の長男だったが、生来、農
業はあまり好きではなく、若いときから東京に出て、
働きながら芝浦電気学校の夜間部を卒業し、電気技術
者になったが、東京では就職をせずに帰郷した。技術
を生かして松山市の伊予鉄道株式会社に勤めていると
きに、同じ町の出身の知人の紹介で母と見合いをして
結婚した。母は和裁がとて上手で、当時としてはま
だ珍しかったミシンを使った裁縫を得意としていた。
また、芸事も好きだったのか、お琴や三味線を習って

いたことを記憶している。

母のいとこの上杉栄さんが満州で成功をしていて、満州に来てひと働きしないか」という誘いがあった。上杉さんの仕事は父と同じ運輸関係の仕事だったが、専門の電気とは畑違いであった。父は大変乗り気になり渡満することになった。郷里の父の両親や親族は、当時はやっていた俗に言う「拝んでもらう」という占いに占ってもらったところ、「凶」と出たので渡満には大反対をしたが、六歳になったばかりの私が、小学校六年生になったら故郷に戻るということで、了解したそうである。

昭和十五年の冬、私たち親子三人は、夢と希望を持って新天地に渡り、満州国三江省佳木斯市ジャムスの順徳街にあった東満住宅に一家を構えることになった。父の就職先は、国際運輸株式会社の佳木斯支店で、父も張り切って精を出して働いた。翌年の昭和十六年四月に、私は佳木斯朝日在満国民学校に入学したが、十月には分校ができて、校区制の変更により大和在満国民学校に転校した。

そして十二月八日の大東亜戦争勃発を迎えたが、それ以来、昭和二十年に五年生になるまでは、戦時下とはいえず平穩無事な生活が続いていた。しかし、昭和二十年の春も過ぎるころになると戦局も段々とひっ迫してきて、敗色が一日一日と濃厚になってきたが、それでもまだ、佳木斯周辺では落ち着いた日常生活であった。そして夏休みになった八月九日、突如として起きたソ連軍の不法侵攻により、その日を境として平和な生活は一変してしまった。

二 佳木斯からの脱出

「どどん！ ずしーん！ ぐわーん！」という、天地を揺るがすような大轟音が起こったのは、昭和二十年八月九日の夜がようやく明けたころのことであった。ここ佳木斯の国際運輸の社宅では、隣近所の人たちが飛び起きてきて空を見上げた。「何事だ！」「一体何が起きたんだらう」と、みんなは、口々に叫びながら不安な顔つきで集まっていた。間もなくして、ラジオから流れるニュースでは、ソ連軍機が佳木斯駅に爆弾を投下したことを伝えた。そして更に、「日本

人は、即時に佳木斯から疎開せよ」という軍命令が出たことも放送していた。まさかと思つた危惧が現実のものとなつて目の前に迫りつつある事態に、社宅の人々はもとより佳木斯の全在留邦人は戦慄してしまつた。そのとき私は満十一歳であつた。父は既に、在郷軍人会の訓練召集で満州国特設警備隊第六〇四部隊に入隊中で不在で、社宅では母と二人だけで生活していた。軍の避難命令を受けて慌ただしく、当座に必要とする衣類、日用品、食糧などの品物をリュックサックに詰め込んだ。あれもこれもと、持つて行きたい物はたくさんあつたが、当時母は妊娠中であり、私は五年生といつてもまだ子供。それに携行できる荷物は、一人にリュックサック一つという制限があつた。

「お部屋をきれいにお掃除して行きましょう。もし満人が家の中に入って来ても、日本人は出て行くときもきちんと片付けていると言われるようにね」と、母は言いながら部屋の掃除を始めた。私も勉強机や本箱をきちんと整理しながら、「一体、いつまたここに戻つて来られるのだろうか?」と考えると、一抹の不

安が心をよぎつた。

社宅の人たちと佳木斯埠頭に行つてみると、松花江を船で下つてハルビンに疎開するという話だった。しかし、配船の手配がつかずに、出航は翌日に延期されることになつたので、その夜は社宅のすぐ横隣りに住んでいる、愛媛県人会で親しかつた松下さんの家で、お別れ会が開かれた。母は、父の入隊先に電話をして父と話をしていたが、このときが父と母の最後の別れになろうとは、夢にも思わなかつた。父は私に、「お母さんの言うことをよく聞いて、元気で氣をつけて行くように」と言つた。佳木斯最後の夜は、このようにして更けていった。

翌日の十日は、朝は雨で明けた。母と私は持つて行く荷物の整理をし直して、夕方に再び埠頭に向かつた。街の中では既に満人の暴徒が蜂起していて、日本人の家に片っ端から押し入り破壊して、めぼしい物を略奪しているという噂が広まっていた。なんだか恐ろしさがひしひしと身に迫ってくるのを感じずにはいられなかつた。松下のおじさんは、国際運輸の社員では

なかったが弓削商船学校出身で海軍の予備役士官だったので、私たちの輸送総指揮官となって一緒にハルビンへ南下することになった。しかし、この疎開は一時的にするのであって、騒ぎが収まればまた帰って来られるのだということを、だれもが信じて疑わなかった。

「さらば佳木斯よ、また来る日まで

しばし別れの、涙がにじむ

恋し佳木斯の、街々見れば

木々の木影に、北斗星」

と、「さらばラバウルよ」の替え歌を、だれともなく歌い出すと、それがまたたく間に大合唱になった。夜間になると、ソ連機の来襲を恐れてローソク一本、マッチ一本つけることを禁じられた。身重な母は、船内の狭い階段の登り降りにも大変な苦勞をしたようであった。こうして五日間の息苦しい避難の船旅を過ごして、八月十四日の夜、無事にハルビン埠頭に到着した。

三 無条件降伏を知る

その夜は船中で一泊し、翌十五日の朝に上陸した。埠頭で、偶然にも在郷軍人で召集されていた国民学校の先生方に会った。「やあ、やってきたね」「これから元気で頑張るんだよ」などと言って、私たちを口々に励まして下さった。重たい荷物を引き摺るようにして、一行が集合所に着いたのは正午すぎだった。みんながそここに円陣をつくって座り込み昼食を始めたころ、だれからともなく「日本が降伏した」という言葉が流れてきた。「無条件降伏だそうだ」「正午のラジオで、天皇陛下が自身で放送されたそうだ」「馬鹿な！それはデマだ」「いまだかつて戦争に負けたことがない日本だ。なんで降伏するものか！」「デマを言うやつはだれだ！」などと口々に出る怒声と罵声が入り交じって、周囲はけんけんごうごうの有様になり、收拾のつかない大混乱となってしまった。

そんな状態が数時間続いたであろうか、やがてそれが事実であるということが分かってくると、騒ぎが急に収まったが、今度は今まで真っ赤になって怒ってい

た人々が、青い顔に変わって黙り込んでしまい、そのうちにあちらこちらですすり泣きが始まり、そのすすり泣きはたちまち号泣に変わっていった。私だって子供ながら、うそであって欲しいと思っていた。「必勝を信じていたんだもの、神国日本を信じていたんだもの。それなのに、無条件降伏とは！」と、繰り返し繰り返しの口の中でつぶやいた。

その日のハルビンの空は好天気で、真夏の太陽が照り輝いていた。その夜は、国際運輸のハルビン支社の手配で、満人街にある収容所に一泊した。輸送総指揮官の松下さん一家とは、社員でなかったのここで別れることになった。収容所では眠られぬ不安な一夜を過ごした。近くで聞こえるピストルの音、遠くでどろく銃声、満軍の反乱らしく銃声や砲声の連続で、恐怖の垣塙まっぴばと化していたハルビンの夜では、一睡もすることができなかった。やっと夜が明けたが、空は何事もなかったかのように、相変わらずの快晴であった。ここに長くいることは危険であるということから、ハルビン支社の世話で「南崗海拉爾街ナガシバイラルダイ」にある、会社の

満人社員寮に移ることとなった。そこはハルビン市内から相当に離れているので、汗びっしょりになりながら歩いた。重たい荷物にたまりかねて、衣服類を次から次と捨てながら歩いた。

この満人社員寮は、煉瓦造りの三階建てで、三十八部屋もある大きな建物であった。一室に七、八家族が入れられ、我が家は二階に入れられた。建物は立派だが内部は汚らしくて、蚤や南京虫がいるのには参ってしまった。だからといってどこへ行くこともできないから、ハルビンの治安情勢が少し落ち着くまでは、ここで籠城することになった。共同炊事による団体生活が始まり、同級生の森本さんの両親が炊事係の責任者となつて、当番制で炊事をしていった。「食事の配給をいたします」と、一階から三階まで触れ回ると、各部屋からは配給当番がおかずを入れるバケツとか、ご飯を入れる飯盒イハコなどを持って集まってきた。精白していい赤い高粱コウライヤ飯なので、もさもさして食べにくくて弱ったことが思い出される。幼い子供たちは下痢をしてしまったが、次第に慣れてきて、今度は、胃拡張に

なりませんよと注意されるくらいに、がつがつと食べるようになった。つい先日までは、満人が赤い高粱飯を食べているのを見て、「あんな物を、よくも食べられること！」と思っていた日本人が、それ以下になり下がってしまったのだった。

四 ソ連兵の暴虐

二、三日すると、ソ連兵がこちら辺りにも入って来た。窓からそつとのぞいて見ると、馬鹿でかい戦車の集団を先頭にして、大きな大砲や、トラックが堂々と行進していた。「これが日本軍だったらなあ！」と思いつながら、みんなはただ黙って眺めていた。それから間もなくして、ソ連兵による略奪、暴行が始まった。私たちの建物にも侵入してきて、自動小銃で脅してはめぼしい品物を強奪していった。「露助がきたぞ！」と叫ぶと、みんなは各室の戸をびしゃりと閉めて内から鍵を掛けて、部屋の中で息を殺していた。軍靴のまま、どこか足音を荒立てて人ってきて、戸をがたがたとゆすって「開けろ！ 開けろ！」と言っているのを黙って聞き流して、音一つ立てずにじっとして

いることは、不気味なものであった。足音が遠のき静かになったので、ほっとしてもう大丈夫かなとそつと戸を開けてみると、戸のすぐそばにのそつとして立っていたりすることもあった。また、いつの間にか建物内に入り込んでいて、こつちも分からないこともあった。手洗いに行つて戻つてみると、その間に部屋に入り込んで、物色していることもあった。みんなが見ている前で、片っ端から荷物を荒らし、腕時計を五つも六つも腕にはめて、更にもうまだ出せと言っているソ連兵もいる。大事な物はおむつかごに入れておけば大丈夫だろうと思つていたら、それまでもかき回して探して、お金や貴重品をこつそりと奪つてしまった。父が大切にしていた勲章も持つて行かれてしまった。目の前での乱暴、狼籍を、ただ黙つたままおびえながら、抵抗もできずに見ていなくてはならぬ歯痒さは、経験した者にしか分からないことだった。自動小銃を肩に掛けて偉そうにしているソ連兵に対して、私たちは「露助」とか「ローモーズ」とかと呼んでいた。ソ連軍の中にも、兵隊を取り締まる憲兵のような

仕事をするのがいて、ソ連兵たちはそれを極度に怖がっていたので、私たちも今までのように黙って、ただされるがままにしないで、悪いソ連兵がきたときは、騒ぎ立てることにした。玄関に門番を立てて、ソ連兵が侵入した気配があると、一階から三階まで連絡を取り合つて、各部屋の人々は廊下に出て、バケツや空き缶をたたき、子供たちをどンドン走り回らせて、更に赤ちゃんをわざとつねって泣かせるなどして、大騒ぎを起こした。侵入してきたソ連兵も、びっくりして何もせずすぐに逃げてしまった。

ある日のこと、ソ連兵が数人でやってきて、日本に帰る切符を渡すからと言って、男の人を全部集めてどこかに連れて行ってしまった。ところがそれはまったくのうそで、強制的に収容して四十日間以上も重労働に従事させたのだ。こうして外地において、敗戦国民となった人々の受難が始まったのだ。敗戦、そして避難民となり果てた私たちの身の上にも、恐るべき北満の厳寒期がやってきた。社員は、支店というよりどころがあったからまだよかったが、満鉄沿線に生活

していた人々は、一応ハルビンまでたどり着いたものの、援助を受けるものも無く、花園国民学校や、桃山国民学校に収容はされたが、満足な食べ物も、衣服も、寝具も無い越冬生活となった。特に悲惨で目を覆うばかりだったのは開拓団の人たちで、ソ連軍には攻撃され、現地民からは暴行、略奪されて、命からがら逃げのびてきたが、その様子たるや乞食こじき以下であった。女性はみんな髪を切つて丸坊主となり、男装していた。収容された学校の校庭にむしろを敷いて生活していたが、飢えと寒さでまず一番に幼い子供から、そして病人や老人などの、体の弱い者からばたばたと倒れていった。もちろん医者などいなくて、診てもらうこともできなかった。そしてその死体は、校庭に山のごとくに積まれたままであった。積まれている死体は、みんな裸であった。家族が埋葬できずに遺棄したときには、まだ粗末ながらも衣服は着せたままであったが、夜になると満人が忍び込んできて、死体から剥ぎ取つて行ってしまうためであった。その話を聞いて、私は一度見に行きたいと言ったら、周りの人たち

から「子供はそんなものはない方がよい。行くな！」と、強く叱られたことを覚えている。

五 死産、そして母の死

ちようどそのころ、ハルビン支社の副支社長になっていた上杉のおじ一家と、同僚の水杉さん一家とが、それまで住んでいた家をソ連軍の上級幹部の宿舎として接収されることになったので、私たちの収容所へやってきた。おじ一家は、ハルビン勤務の前は伴木斯にいて顔なじみの人が多くいたので、ここに移ってきたのだった。母も私も、おじ一家が一緒の所で生活することになり、大変に心強くなり有り難かった。

しかしその母は、ハルビンにたどり着いたところから元気が無くなっていた。妊娠中でもあったが、絶えず風邪をひいたり、熱を出しては体がだるかったりしていた。狐^{コモ}茂^ダ田さんにお灸をすえてもらったりしていたが、寝たり起きたりの状態であった。収容所という不自由なところで病気になったのだから、大変なことだった。幸いに隣の満鉄関係者の収容所に、小野先生というお医者さんがいたので、往診を頼み治療をして

もらうことになった。このお医者さんは本来は外科専門だけれども、このような事態になれば外科だの、内科だのとは言っておられるものではなかった。私たちの収容所の者は、みんなこの小野先生にお世話になったものである。

母が病気になったので、二階にいた私たちは、一階の病室になっていた部屋に移ることになった。不衛生な環境状態の中での団体生活であるので、いろいろな病気がはやりやすくなっている。小児結核だの腎臓病だのと、大人、子供を問わず毎日、死人の出ない日はなかった。堀さんのところの賢ちゃん、木村瑞枝さんと、ばたばたと死んでしまった。加藤さんの家では、いばさん、完治ちゃん、よし子さんが次々と病気になり、亡くなってしまった。一家全滅となった。

私たちの部屋の前は葬儀室になっていたが、そこでは読経の音が始めると、線香の煙が立ち上り、やがて棺桶が外に運び出されるといことが絶えず繰り返されていた。棺桶に入れられる人はまだましな人で、棺桶の無いときには、むしろにくるんだままであった。

火葬する所もなく、土葬する場所も無く、たとえあつても厳寒期には掘ることができずに山積みにされてしまった。その死体を捨てるか、埋めるかしてもすぐはどこからともなく満人がやってきて、掘り返して着ている物はいで持って行ってしまふので、死体は裸のままでかちかちに凍ってしまったという話が私たち子供の耳にも伝わっていた。

母の病状は段々と、思わしくなくなってきたが、ある日のこと、私は陰気な病室から出て上杉のお婆の部屋で遊んでいたら、梅本のお婆さんが病気で少しむくんでいる体を「ふう！ ふう！」いわせながら飛び込んで来て、「壽子ちゃん！ 母ちゃんが！ 早く早く」と叫んだ。ただならぬ気配に私はびっくりした。夢中で部屋を飛び出して、階段を二、三段ずつ一気に飛び降りた。胸が「どどっ、どどっ」と高鳴って、息が切れそうだった。私が、病室に飛び込んだときには、母は痙攣を起こして、目を白黒させていた。「母ちゃん！ 母ちゃん！」と、私は一生懸命に母を呼んだ。そのうちに上杉のおじ、お婆が駆けつけてきて、脈拍

をとってみると「どどっ、どどっ」と強く打ったと思うとびたりと止まり、ちょっと間を置いて、また「どどっ、どどっ」と強く打つことの繰り返しであった。母にもしものことがあつたらと思うと、私は気が気ではなかつた。が、しばらくすると母は正気を取り戻した。「壽子！ 壽子！」と、母はそう言って空を手で探るようなしぐさをしたので、お婆が「ユキさん！ 壽子はここにいるからね。安心して寝なさい」と言って、私の手を母に握らせた。母の手は生暖かかった。それからの母は、身動きもできない重病人になつてしまった。

ある晩ふと目が覚めると、三人のソ連兵が病室に入ってきて、みんなの荷物をこそごとかき回しているのに気がついた。横を見ると母も目を覚ましていたが、私は怖かったので寝たふりをしていた。荷物をひっかき終わったソ連兵は、同じように母親の看護のために病室に泊まっていた、桃田さんのお姉さんに対して「外に出ろ！」と言い出した。お姉さんは知らぬ顔をしていたが、「一緒について来い」と言ってきか

ないものだから、仕方がなく立ち上がって、ついて行くふりをして戸を開けて廊下に出るや否や、非常階段の方へ駆け上がって無事に逃げた。そのソ連兵は怒って引き返してきて、病室の天井に向けて自動小銃を発射した。「だーん！ だーん！」という響きに、私たちも撃たれるのかと思って怖かった。それから、お姉さんの荷物を腹いせにひっくり返して、いろんな物を奪って出て行った。

熱が高いうえに、あんなものすごい音を聞いたからか、母はのぼせて耳が遠くなってしまった。私は、このときほどソ連兵を憎んだことはなかった。世界中のどの国の人よりも憎いと思った。私のような子供の目にも、ソ連兵の教養の無さがよく分かった。腕に三つも四つも時計をして喜んでいたり、道端の雀を小銃で撃って遊んだりしているのを見ると、軍規などというものがあるのだろうか、疑わざるを得ないことであつた。母は、重体の身でありながら男の子を出産したが、当然死産であつた。赤子の顔は水晶のように透き通っていた。この受難の時期に、一瞬にして去つた

名も無き私の弟であつた。部屋の人々は、「こんな境遇で生きていて苦しむより、死んだ方があの子にとっては幸いだよ」と言つて、慰めてくれたながらお互いに泣いていた。産後の母の容態は急に悪化していった。四〇度もの高熱が続き床擦れもできた。「早く内地に帰つて、立花のおばあさんに会いたい」と、それが母の口ぐせであつた。私は、「こんなに弱つても、おばあさんに会いたいものなのかなあ」と、ただ黙つて母の顔を見ているだけであつた。

ある日、松下さん夫婦が訪ねてきた。ハルビン埠頭に上陸して別れて以来であつたが、母の夢を見て気になつたので訪ねたとのことで、母が重症であることを知つて驚いていた。「いつも母さんの看病ばかりをしているのだから。今日は街に連れて行ってあげよう」と、私を市街に連れて行っていろいろな物を買つてくれた。

十一月末のころには、思いもかけず母の容態が良くなつて急に元気が出てきた。まだ起きることは無理であつたが、寝返りが打てるようになり、「もう二、三

日したら、うつ向きにもなれるでしょう」と小野先生からも言われたが、そのとおりに母は、ようやくうつ向きにもなることができ、更に一人で茶碗に注いだお茶が飲めるようにもなった。青白い顔に嬉しそうな表情を浮かべて、久しぶりに母と私は笑い合った。「もう二、三日したら、今度は起きられるようになるよ、きつ」と話し合った。しかし、そのきつとはとうとう来なかった。

翌日の夕方から急に悪化して、再びひどい痙攣が連続して起こった。小野先生を呼びに行ったが、あいにく留守で診てもらえなかった。おばが徹夜で看病してくれたが、朝になって母の意識は無くなってしまった。何を言っても目は虚空を見つめたままで、言葉は出なかった。「母ちゃん！塩豆買って食べてもいい？」と、こんなときだというのに、私は母におやつのおねだりをしていた。だが、母からの返事はなかった。ただかすかに首が動いたのを見て、承諾と受け止めて買いに行き、母の枕元に座ってぼりぼりとかんでいた。

夕方になって小野先生が来て、診察をするや否や、すぐに胸に注射をした。「どうでしょうか？」という周りの人の質問に、「今夜一晩ぐらいでしようね」という、静かにして素っ気ない返事であった。私の心も冷静であったが、予期していたような、していないような複雑な気持ちだった。いつかはこういうときが来る。そのいつかとは、いつのことかは考えてもいなかったが、まさにそれが今であることは、子供心にもはっきりと分かった。

夜更けて、母は静かに息を引き取った。その夜はお通夜をして、みんなにお参りしてもらった。おじは私を膝に乗せて、「壽子！内地に帰るまでは、おじさんがお父さんになってやろうかな？」と言ってくれた。越智家は真言宗だということから、翌日真言宗のお坊さんを捜してもらって、読経してもらった。焼香が済んでお棺に釘を打つとき、「壽子ちゃん、よく母ちゃんの顔を見ておくんですよ」と言われて、お棺の側に連れて行かれた。母の顔は、目をつぶって眠っているように安らかで青白かった。いつまでも

忘れられない思い出である。お棺を見送って門まで出たが、それから先はついて行けなかった。「どこに運ばれて行くのか?」「これからどうなるのか?」「それは一切、私の知らないことであつた。私に残されたのは、ただひと握りの黒髪だけであつた。

私には、母の兄嫁である梅本のおばがいたが、上杉家に引き取られることになつた。梅本のおばも、「心臓脚氣」が原因で一月の中ごろに亡くなつてしまつた。佳子という四歳の子供を私に託して行つた。私と佳子とは孤兒になつてしまつたので、二人して上杉家に引き取られたのだつた。万里の異郷にあつて、しかも敗戦避難民という異常な境遇のもとで、もしも上杉のおじ、おばがいなかつたならば、一体どうなつていたであらうか。考えただけでも戦慄で背筋が凍り付くようである。思えば上杉夫妻は、私たちの生涯の大恩人というべき人であつた。

六 そのころの生活

そのころ、おやつで好まれていたのは塩豆で、大豆を油で揚げて塩を振りかけたもので、コップ一杯が二

円であつた。それと、向日葵や、スイカの種、大福餅にうぐいす餅、おはぎなどで、一個二円から二円五十銭だつた。パンは五円、巻き寿司八円から十円。お米が、一升三十円程度で、ソ連紙幣、八路軍紙幣で色鮮やかな原色刷りであつた。ハルビンに落ち着き月日がたつにつれて、持っていたお金も少なくなつたので、避難民はいろいろな仕事をして収入を得ていた。「麻袋縫い」や街頭での物売りが主だつたが、子供たちまで朝早くに市場に行つて、餅だのおはぎだのを仕入れては売り歩いた。

ハルビンの街外れに陸軍病院があつたが、病院内の兵隊や、軍属の人たちは一歩も外に出られないので、診療にかこつけて病院内に入り、パン、餅、おはぎなどを売りさばいた。病院内の人はお金を持っていたので、街頭よりも高い値段で飛ぶように売れた。そのうちに取り締まりが厳しくなつて、入門時に検査するようになつた。今度は、赤子を診察してもらうようなふりをして、ねんねこの内に品物を入れて持ち込んだ。狸と狐の化かし合ひだつた。私も二度ほど、園田のお

ばさんについて行った。一度は中に入ったが、一度は門の外で待たされた。「すぐに戻って来るから、どこにも行ったら駄目よ」と言っただけで門の中に入って行った。辺りは静まりかえっていて、家も人もいない郊外なので寂しくなってきた。「おばさん早く戻って来ないかなあ」と思っているうちに、向こうから一人のソ連軍将校が歩いてきた。こっちに向かって来るような気がした。こんな所でうろろろしてはいけないと思っただけ、もときた道を足早に引き返した。将校は、まだ私の後を歩いていた。私は、おびえていることを悟られてはならないと思うと、気が気ではなかった。ようやく人通りの多い街中に入ったときは、ほっとした。将校は、何事でもない顔をして通り過ぎた。しばらくしておばさんが、顔色を変えて戻って来たが、私の顔を見てほっとして言った。「壽子ちゃんのことだから、まさか間違いはないだろうと思ったけれど！」と随分心配させたようだった。

収容所で、慰安のための素人演芸会が開かれた事があった。敗戦後とはいえ、すべて軍国調のものばかり

だった。「若鷺の歌」「子科練」「軍国子守歌」など、何を聞いてもみんな以前を懐かしんだ。上手だった人を投票で選んだ。一等は多田のおじさんの浪曲で「雪と墨」、二等は石森兄弟の独唱で「麦と兵隊」であった。劇の「石童丸」は、ものすごい人気でみんな涙を流して観劇した。何の変化も無い暗い収容生活の毎日だったので、この演芸会は、明るい新鮮な息吹を与えてくれた。

そのころ、おじは運悪く発疹チフスにかかっていた。生死の瀬戸際にあつて、おばは必死で看病していた。私自身も体の具合を悪くしていて、寝たり起きたりの生活だったが、自分ではそんなにひどいとは思っていなかった。しかし、後で聞くと死ぬかもしれないという重病だったらしい。二人の病人を抱えて、おばは本当に大変だったことと思うが、そのおかげで二人共、無事に回復した。ところが今度は、佳子が腸の具合を悪くして、便所に行くたびに脱肛していた。佳子はそのたびに、「赤チンがでた、赤チンが出た」と言っただけで泣いて泣いた。私にとっては、佳子の世

話はなかなか大変な仕事であった。

いづごろのことだったか、月日はよく覚えていないが、私たちの収容所がソ連軍に接収されることになり、立ち退きを命じられた。国際運輸社員家族として団体行動をとってきた私たちには、もう集団で移るべき所はなかった。解散をしてばらばらにならざるを得なかったので、「お互いに内地に帰り着く日まで、必ず元気で生き抜いて行きましょう」とみんなで誓い合って別れた。上杉一家は、郵政街の桜井さんの家に置いてもらうことになった。他に水杉、木村、大村の各家族も一緒だったので、総勢十一人の大世帯の生活が始まった。子供のなかでは、私が最年長で十二歳であったが、佳子の世話をしていたので、みんなからは「お母さん」とおどけて呼ばれていたが、私には何か寂しくて嫌な感じがしていた。しかし、そんなことに挫けずにリーダーとなつて、子供たちの面倒をみていた。

おじが、学校の収容所に三浦のおじさんがいたといつて連れてきた。三浦夫妻の仲人がおじ夫妻だっ

た。でも、連れてきて数日もたたないうちに、腸チフスで亡くなってしまった。既にチフスにかかっていたのだ。何かの都合で、出棺が遅れた。棺にはドライアイスのような物を詰め込んであったが、たちまち悪臭や悪汗が立ち込めて、苦しい思いをした。

日がたつにつれて持っているお金も減り、売り食いが生活の常とうとなった。でも周りの人々のおかげで、私たち二人は変わらない生活ができた。いろいろな商売もした。卵の花揚げ、油揚げ、巻き寿司、おはぎなどを作って方々に卸し売ったり、小売りしたりした。面白くて仁侠的なブローカーのニイヤン、親切で優しかった小間物屋のニイヤン、みんな思い出の中にある人たちである。

私は夕方になると散歩に出た。裕枝ちゃんを背負い、英子ちゃんと佳子を両手につないで、その向こうに更に泰ちゃんをつながせて歩いた。満人が、「ショウハイ、マイマイ！（子供、売らんか）」とからかつて通る。私は、「ショウマ！ ショウハイ、マイマイ！（何を！ 子供売れだと、とんでもない）」とつぶやい

て、「日本人は、負けたってお前たちに馬鹿になどさ
れないぞ！」という気持ちになって擦れ違っていたも
のだった。

七 引揚げ始まる

再び八月が巡って来た。八月末に私たちの住んでい
る「南崗」地域の引揚げの番が回ってきた。大隊、中
隊、小隊を編成しての行動となった。水杉一家は何の
理由か分からないが別行動となり、残り八人に新たに
渡部さん一家の三人が加わって、十一人が一家族と
なって行動することになった。

荷物は少なくしても、なるべく良い物を持って帰ら
なくてはと考えて、指輪などの貴金属は布団の綿の中
に入るなど工夫して荷物を作った。持っただけでは駄
目だから、着れる物は着てと、鹿の皮のズボンの上か
ら黒布をあてて、普通のズボンのように見せかけるな
ど考えて実行した。

駅に集まると、八路军による荷物検査があった。こ
の検査を通過しないと、汽車に乗せてくれないのであ
る。せっかく荷造りしたものを、再び全部ほどいて一

品、一品調べられた。回りは足の踏み場もなく荷物が
散乱していたが、検査とは口実に過ぎずめばしい物を
強奪するのがねらいであった。私も身体検査をされ
て、もう少して「よし」と言われそうときに、布下
のシカの皮ズボンの金具が当たって、「かちっ」とい
う音がした。すぐに「脱げ！」との声、ついにシカ皮
のズボンは奪われてしまった。私は、歯を食いしばっ
て相手をにらんでやった。全く無抵抗に、自分の物を
なすがままにされて、じっとしていなければならぬ
なんて、こんなことがあってよいのかと、頭の中では
怒りでいっぱいであった。しかし、一人で怒っていて
も、どうにもならないことだった。それよりも早く汽車
に乗ることだった。乗りさえすれば、あとは内地に向
かってまっしぐらである。それだけでよかったのだ。

佳木斯から疎開してきて一年余り、かなり住み慣れ
たハルビンを、列車と共に離れた。駅頭に、いかめし
くそばびえていた伊藤博文公の銅像も、哀れむように私
たちを見ていた。母が土となったハルビンが、いろい
ろな思い出と共に霞んでいった。乗った列車は無蓋車

だったので、移りゆく景色は手にとる様だったが、飛んで来る煤煙でみんなは薄黒くなっていた。とにかく苦しい旅だった。途中で線路が破壊されていて、四十数キロメートルの間歩かされた。ところが、八路軍と国民軍との境界であった。とても一日で歩ける行程ではなかった。しかし歩くしか方法は無く、みんなは歩いた。大人は荷物を背負っているから、子供たちを背負うこともできず、子供たちも歩かされた。私も荷物を背負い、佳子の手を引いて歩いた。木村のおぼさんは、カンガルーの様に背中に荷物を、お腹に二歳の裕枝ちゃんをくくりつけて歩いた。迷って泣いている子供、歩けないで落伍して行く人。しかし、そんな人々に同情している余力もない。みんなは、自分自身を目的の地に近づけることだけで精いっぱいであった。それでも荷物の多い人は、苦力を雇った。だが始終一緒についていないと、荷物を持ち逃げされるので気が気でなかった。ちょっと目を離しただけでも、渡部の和ちゃんのセーターが無くなった。雇った苦力を見ると、上衣の下からセーターが見えている。「お前!

これを盗んだのではないのか」とつめよると、「返したらいいだろう」と他人事のような顔をしていた。また、最初に約束した賃金より高く要求するので、八路軍に仲介を頼むと、「欲しがるだけ払え!」と言おう。そして、後で分け前をもらっていた。こんなことがあろうちに夜になり、一同は線路わきで野宿となった。翌日、ようやく目的地に着いて国民軍に引き継がれた。これで汽車に乗れさえすれば、一路日本へと気持ちが高鳴ったが、それは間違いであった。新京(長春)に着いて、十二日間も足止めされた。ようやく口島に向かったと思ったら、また逆戻りで、錦州で十日程滞在了。ここで伝染病でも出たら、またまた遅れるので、みんなは最大の注意を払った。どんな注意をしていたかは、今は忘れてしまったが、一人も病人を出さずに、再び口島に向かった。途中では心配をしていたが、今度は本当に船に乗ることとなった。ハルビンを出てから四十数日かかっていた。

八 引揚船に乗る

私たちを運ぶ引揚船「花月丸」は、静かに埠頭に横

付けされていた。国民軍の手から、日本の船員の手に渡されたときのあの安堵感、久しぶりに仰ぐマストの日の丸の旗、船内に鳴り渡る日本の音楽など、すべてに感激し、感涙していた。ぐっと胸にこみ上げて来るものを、抑えることができなかった。失いかけていた日本の面影が、よみがえってきた。「御苦勞様、御苦勞様でした」と迎えてくれる船員さんに、引揚者全員溢れる涙で感謝しながら乗船した。ドラが鳴り、汽笛が響き、船は次第にコロ島の岸壁を離れて行った。空は真っ青に澄み渡り、心地良い潮風が流れていた。水平線が、美しくはつきりと映し出された。「お母さん！ お母さん！」と、母の遺髪を胸に抱きしめて、あらん限りの大声を出して叫んだ。それは悲しみでもあったが、これからの期待をも込めていた。

数え年七歳で、両親と一緒に渡満し、今日十二歳で再び日本に戻った私。内地の様子はあまり記憶には残っていないかったので、不安でもあった。船中でいろいろな想像をしている私を乗せて、「花月丸」は一路、博多に向かっていた。

九 引揚げ後のこと

昭和二十一年十月、私たち十一人の引揚げ一家は、九州の博多港に着き、防疫、書類作成などの引揚げ手続きを終えて、一家は別々の行動をとった。上杉、大村、木村家は長崎県へ、渡辺、越智、梅本家は愛媛県へと、それぞれ落ち着き先に向かって出発した。私と佳子は、渡辺さんによって丹原町の祖母の元に届けられた。渡辺さんは隣町の小松町であったので、連れて行ってもらったのだった。翌日、今度は私が、佳子を松山の祖父母の所に届けた。

終戦より一年三カ月あまり学校に行けなかった私は、十月から五年生をやり直した。翌年の昭和二十二年五月に、父がソ連の抑留生活から解放されて無事に帰国した。我が家の門前に立った時、おしめが干してあったのを見て、妻も無事出産し親子三人で帰国しているのだと思って、喜び勇んで玄関に入ってきた。しかしそのおしめは、父の弟夫婦の子供のものであった。これも悲しい一つの話である。

父は村の農業協同組合に勤め、再婚もして順調で

あったが、シベリアでの抑留生活の無理がたたり、結核などの病気を患い、一時はそれを克服したが、病には勝てず昭和四十一年十二月に六十一歳の生涯を閉じた。私も高校に進学したが、父の病気により経済的に困難となり、夜間部に移り、卒業後は玉川大学の通信教育を受けていたが、町役場に就職していたため、夏のスクーリングに行くことができず二年で休学し、向学心を断ち切られてしまった。

昭和四十五年八月十五日、国際運輸株式会社互助会によって、高野山奥の院に物故社友と物故家族の慰霊碑が建立され、父母、上杉夫妻も合祀された。毎年八月末には全国各地から関係者が集い、盛大な慰霊祭が行われている。

渡満は、私たち家族に何らの利益をももたらさなかったばかりか、かえって不幸な結果をもたらした。満州に行かなければよかったのにと、思わぬでもないが、志を抱き時代の波に乗って雄飛した父を、恨んではいない。すべては、「戦争」というもののためであった。かなうものならば、佳木斯や、ハルビンを慰

霊のために訪れてみたいと願うものである。